

滑川市早月加積地区／清流の里めぐり 2014年8月22日

## 9. 明日の早月を考える会



### ■ 活性化へ住民自ら行動

「地区の自慢だけじゃなくて、課題もしっかり盛り込まん」と「若者や高齢者の比率も住民の関心が高いと思う」 テーブルを挟んで男たちが顔を付き合わせる。和やかな雰囲気ながら、話のやりとりは真剣だ。

7月下旬の夜、滑川市三ヶの八倉巻忠夫さん（79）宅。早月加積地区の住民有志でつくるグループの企画会議にお邪魔した。地区の現状をまとめた冊子を作って住民に配ろうと、役員たちが内容のアイデアを出し合っている。

グループの名前は「明日の早月を考える会」。住民の絆を深め、地域を活性化させよ

うと2年前に結成した。

「いまや地方の人間関係も都会みたいに砂漠化してしまった。人口も減って元気がなくなっている。これを何とかせんと。自分たちでやれることはやる、という気構えで」

八倉巻さんが熱っぽく語り出す。元県議で、会の代表を務める。会員は60～70代の35人。大手企業にいた元企業戦士や元市教育長、元教員、寺の住職など顔触れは多彩だ。「せっかくの人材を生かさない手はないと思って。退職後の人生で地域に恩返ししたいという人もいるからね」

会ではまず、地区の課題を知るため全戸アンケートを行った。9割近い758世帯が答え、「大雨が降ると水路があふれる」「年を取った時の買い物や医療が心配」などさまざまな声が寄せられた。メンバーも地区を歩き、川の護岸堤が崩れた場所など危険箇所を確認。住民の声や現状をまとめ、対策が必要として地区自治会連合会に提言した。

また、火災で焼失した早月加積小学校の歴史を後世に伝えようと、同市追分の跡地に校跡碑（こうせきひ）を建てた。

今後も、郷土史の編さんや自主防災活動、地元の事業所と住民の交流復活に向けた工場見学などを思い描く。「一つでも二つでも、行動を起こさんと何も始まらないでしょう。他にもね、皆でこんなことを考えていてね…」

八倉巻さんの話が止まらない。早月加積を愛し、元気付けたいと願う男たちのアイデアは尽きそうにない。暑くて熱い、夏の夜が更けてゆく。

■遠望近信 眞田法子さん（32）東京都江東区、ANAビジネスソリューション講師

客室乗務員として海外や国内の各地を訪れた際、不思議と目がいくのはその土地の自然でした。東京でもちょっとした緑に目がいきます。自然に囲まれて育った影響でしょうか。富山を思い出し、「帰りたい」と思うんです。

田んぼ一面のレンゲ畑や、菜の花畑、カブトムシやクワガタムシを捕まえた林…。家の前で祖母とホタル捕りもしましたね。こうした幼いころの風景の大切さに、大人になって気付いた気がします。

帰省するたび、東京と富山の「空気」の違いを感じ、癒やされます。（追分出身）